慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竟陵派の選評に対する認識について：選評の主観性を中心として
Sub Title	The cognition of poem criticizing selection and criticizing in Jing Ling school
Author	高, 仁徳(Ko, In-Duck)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.62, (1993. 2) ,p.111- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00620001-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竟陵派の選評に対する認識

——選評の主観性を中心として——

高　仁　徳

一、はじめに

中国の明末に活躍した、いわゆる竟陵派の代表として称せられる鍾惺と譚元春が『詩歸』を選評したもっとも大きい動機の一つは、後七子の李攀龍が作った『古今詩刪』に対抗するためであった。この点は入矢義高氏が「詩歸について」[1]の中で、『詩歸』が作られた経過と、それが当時及び後代の文壇に与えた影響とを論じた中ですでに指摘されている。しかし鍾惺みずから「蓋し平生の精力の、十の九は詩歸一書に尽きぬ。」[2]と言っているように、彼らが心血を傾けて『詩歸』を編纂した理由は、ただこの点だけではない。すなわち、彼らは古人及び当時の人々の作品を選評すること自体を非常に重視し、そこに大きい意味を見出したのである。中国文学史の上で選評の歴史は長いが、彼ら（その中でも特に鍾惺）のように、繰り返して選評の意義を強調した人が外にいるだろうか？もちろん明代、特に明末には多くの詩文の選集が編纂されているので、彼らの選評重視の考えが、そういう時代的状況を背景にしていることは容易に推測

できる。従って、竟陵派の選評重視の思想は、明末の文学活動の重要な一面を彼らなりに意味付けていると言えよう。だとすれば、それが具体的にどういうものであったかを考察してみるのも、決してむだなことだとは思われない。

今まで多くの中国文学批評史や研究書は、主に竟陵派の創作論を含む詩文理論について述べ、竟陵派の選評活動や選評重視の思想についてはあまり注意を払わなかったが、方孝岳の『中国文学批評』と呉宏一の『清代詩学初探』は彼らの選評についての考え方にも注目して記述している。そして明代の文学批評に関係する書物の中ではおそらく一番新しいと言える上海古籍出版社の『明代文学批評史』（一九九一年出版）では、『詩歸』について述べながら竟陵派の選評についての考え方にも触れている。しかしいずれの論述も簡潔でその全貌を知るのに充分だとは言いがたい。小論ではこれらの先行研究も参考した上、なるべく鍾惺と譚元春の文章を多く引用しながら彼らにとって選評とはどういう意味を持っていたかを追跡してみたいが、その中でも特に詩評価においての客観性と主観性についての彼らの認識に重点を置くことにする。なお、論理展開の関係上、すでに発表した拙稿「竟陵派の文学理論—公安派との差異点に重点をおいて—」[3]と引用文の一部分が重なるところがあることを付記して置く。

二

『詩歸』以外にも鍾惺（あるいは鍾惺と譚元春）の名を選評者（選者あるいは評者も含めて）とする書物が多く伝えられている。『四庫総目提要』（総集類存目）には『詩歸』と共に『明詩歸』、『名媛詩歸』、『周文歸』、『宋文歸』が記載されていて、その中で『明詩歸』と『名媛詩歸』は偽託とされている。入矢義高氏は「詩歸について」の中で、鍾惺と譚元春の書として伝わるもので『歸』の名を取ったものだけをいろいろな書目から拾ってみるとして、『四庫総目提要』

の『詩歸』を除いた四書以外に『秦文歸』、『漢文歸』、『南北朝文歸』、『唐文歸』、『八大家文歸』の名を挙げており、「いずれも坊賈が鍾譚に名を託したものと断じてよからう」と言われる。鍾惺と譚元春に偽託したものは小説関係の書まで及んでいて、日本でも以前に白木直也氏によって『水滸傳』の批評書である『鍾伯敬批評四知館刊本』についての一連の論文が書かれているが、(4) この書もやはり偽託であることが明らかにされている。鍾惺にはまた『詩經』に関する書など(5)いろいろ伝えられており、それらを全部挙げるとすれば切りがないが、上で列挙した書物も含めてそのすべてを偽託として片付けてしまうのは少し早計すぎるのではないだろうか。鍾惺と譚元春を選評者にする書を全部整理して、本物は言うまでもなく、偽託はそれなりにその特徴を調べてみることは、鍾惺と譚元春が当時の人々にどういう選評家として受け入れられたかが分かる、すこぶる興味深い問題だと思うが、今の筆者には力の及ばぬことである。ここでこれらの書物があり、なおその一部分が現在も残っていることを紹介するのは、(6)『詩歸』が当時どれほど盛行したかを知るのに役に立つのはもちろん、鍾惺と譚元春の当時においての選評家としての面貌が窺えるからである。

実際、選評家としての評価の高低はともかく、特に鍾惺が選評するのを好んだことは当時に広く認められたようである。明末清初の人、周亮工が編んだ『尺牘新鈔』には、鍾惺と譚元春及び『詩歸』についての言及がしばしば見えるが、その中で范文光は「刻李鍾合選與友人（又）」で、「伯敬裁つことを好めども、筆を下すこと簡ならざるは、胸中厚からざるに縁るのみ。」と言う。そして鍾惺の友人の商孟和は、「詩、選せずんば詩ならざるなり。選、鍾子ならずんば、選ならざるなり。(7)」と言い、鍾惺に自らの詩集の選を頼んでいる。鍾惺の『隠秀軒集』には、鍾惺が人のために詩集を選して、その後書いた序がいくつか載せられている。もともとある程度名声を得た詩文家に、その友人や追従者達が自分の詩集の選や序を頼むことは一般的なことではあるが、鍾惺は選評家としての自覚と自信を持っていたようである。鍾惺

は譚元春の詩集の序である「簡遠堂近詩序」(8)の中で、若く自信満満な譚元春はたとえ「畏友名師」の指摘でも、もし当らなければ決して受け入れないが、片語の去取においても鍾惺の裁決を待つとしながら次のように言う。

夫錦繡千尺、善作者不必善裁、善裁者不必善作、世固有不能詩而知詩者、予所裁決、或亦有以相中乎！

（千尺のにしきをよく作る人が必ずしもよく裁つわけではなく、よく裁つひとがかならずしもよく作るわけではない。世にはまことに詩をつくることはできないが知ることはできる人がいる。私が詩を評するのにも、あるいはまた当るところがあるでしょう！）

詩を作るのと詩を論ずるのが異なることをはっきりと認識していたことが分かる。これは今日の人々には当然のことであるが、古典時代の中国では一般に詩人が詩を論ずることも兼ねていたのだから、鍾惺はやはり普通以上詩を論ずることを意識していたと言えよう。その点は次の文章からも窺える。

夫所謂反覆於厚之一字者、心知詩中實有此境也、其下筆未能如此者、則所謂知而未蹈、期而未至、望而未之見也。

（いわゆる「厚」の一字を反覆するのは、心では詩には実にこういう境界があるのを知っているからである。筆を取った時この境界に至ることができないのは、すなわちいわゆる知っているが実行できなく、待っているが至らなく、望んでいるが見えないということである。）『隱秀軒集』・往集・「與高孩之觀察」

この文は、『詩歸』の中には「厚」という詩境をもって詩を評すること多いけれども、鍾惺の作品は「厚」に至っていないという指摘に対する弁解である。やはり詩を知ることと作ることとのギャップを述べている。鍾惺はまた外の所でも繰り返して自身の作品の欠点を素直に認めているが、その中の一個所を例に挙げれば次のようである。

我輩文字到極無烟火處、便是機鋒、自知之而無可奈何、而是一業。

（われわれの作品は、飯を炊くけむりのように素朴なところがまったくなく、すなわち禅問答のようにするどい。自らもそれを知っているが、どうすることもできないのだから、前世での行ないに対する報いである。）『隱秀軒集』・往集・「答同年尹孔昭」

以上でも窺えるように、人に天賦の素質というものがあるとすれば、鍾惺には創作より作品を論ずることにその素質があったようである。当時、文人として自負していた人の中にも、創作の才能に恵まれていない人はいくらでもあるだろうが、鍾惺が自身の作品の欠点をあっさりと認めたのは「知詩者」としての自負と余裕があったからではないだろうか。実際に鍾惺は多くの選評を行ない、その素質を遺憾なく発揮したのである。もちろんだからと言って当時及び後代の文人達に選評家としての評価が必ずしも高かったとは言えないが、おもいきり個性的な選評を行ない『詩歸』を明末清初の文壇に盛行させたのは、やはり選評家としての強い自信があったからである。それだけ選評自体についての発言も多く、それを重要視しているのである。

三

詩文を選評するということは、窮極的には作品の善し悪しを判断することにもとづいている。そして上の例文で鍾惺の言う「善裁者」或いは「知詩者」とは、よい作品とそうではない作品を判断することができて、それが外の人々を説得できるように客観性を保っている人を指していると言えよう。しかし、一方実際に選評を行うにあたっては、選評者によって評価の基準が異なるわけで、どの選評が妥当性を保っているかを判断するのは極めて難しいことである。鍾惺と譚元春の選評についての認識にも、選評の客観性に対する信頼と、選評主観的にならざるを得ないものであるという認識が同居しているが、以下はその絡み合いの具体的な様子について述べていきたい。

鍾惺と譚元春の選評活動はその対象によって大きく二つに分けられる。当時の人々の個人集の場合と、一代以上を範囲とする複数の古人の作品から選する場合である。そしてそれぞれ彼らにとって選の意味が微妙に異なって来る。

当時の人の個人集の場合、彼らは「少数のよいもの」だけ選することを主張する。こういう考えは特に鍾惺の文集の中でしばしば見られるが、「題魯文恪詩選後二則」の中によくまとめられている。次に引用してみる。

> 觀古人全詩、或不過數十首。少或至數首、每喜其精、而疑其全者或不止此。其中散没不傳者、不無或亦有人乎選之、不則自選、存其所必可傳者而已。故精於選者、作者之功臣也。向使全者盡傳於今、安知讀者不反致崔信明之譏乎？
>
> （古人の伝えられている全詩を見れば、ある人は数十首に過ぎない。少ない人は数首に至り、いつもその精華なることを喜ぶが、その詩人のもともとの詩の全部はこれだけではないだろうと疑う。もともとの詩の中の散没して伝えら

れていないものには、あるいは作者以外の人が除いたのもあるだろうし、そうではなければ作者が自ら除き、必ず伝えるべきものだけを保存したのだろう。故に精細な選をする人は、作者の功臣である。以前にもしその作品の全部をことごとく今まで伝えたとすれば、読者によって、よくない作品のためよい作品まで見捨てられた崔信明のような目にあわされないとどうして知ることができよう?)『隠秀軒集』・餘集

上の文章で読み取れるものを要約すれば、詩には「可傳者」、すなわち伝えるべきよい詩とそうではないものがあり、それを判断するのは選者である。そして選者が誰であろうと、詩を選して小数のよい詩だけを残すのは、鍾惺にとって喜ぶべきことである。つまり、ここで鍾惺における選とはよい詩とそうではない詩を客観的に判断することである。

では彼らの想定するよい詩とはどういう詩であり、なぜそれほど強く選することを主張するのか?鍾惺と譚元春、二人の共通の友人でやはり竟陵派の一人と数えられる蔡復一は次のように言う。

自愛其詩文者貴少、愛人之詩文者貴嚴。必嚴、而作者之精神始見、必少、而觀者之精神與作者始合。且吾輩終日獻酬人事、神明如珠、豈能從萬斛泉中、涌出滔滔奔奔、趂筆而爲之?豈能自滿作者之意、而何以接天下後世之眼?子他日爲我精選數十篇、令其可傳足矣!

(自らの詩文を愛する人は数が少ないこと—少数だけ選すること—を貴び、人の詩文を愛する人は厳しいこと—厳しく選すること—を愛する。必ず厳しく選して始めて作者の精神が見え、必ず少なく選した後始めて読者と作者の精神が合う。われらは終日人の接待や人事に追われるのに、どうやって珠玉のごとき精神が、尽きない泉の中から洋洋と

湧き出て、筆に乗って詩文を為すことができるだろうか？どうやって作者自らの意を満足させることができて、どうやって世の中の人や後世の眼に接することができるだろうか？君が後日、私のため数十篇を精選して、後世に伝えるようにして下されば私は満足する。）『譚友夏合集』・巻八・「蔡清憲公全集序」

この文章から見れば、彼らにとって選するべきよい詩とは、作者の精神が現れている詩であることが分る。鍾惺の散文と『詩歸』を見れば、「厚」を初めとしていろいろの詩境がよい詩の境地とされているが、それらの詩境を為すための必須の条件が作者の精神が現れていることになるだろう。世事にわずらわされてはいつも精神が現れている詩文を作ることができるとは限らない。そして作者の精神が現れている真の作品とそうではない作品をいっしょに置けば、真の作品が偽の作品に覆われて、作者の精神が見えなくなるのである。だから厳しく選しなければならないのである。結果的に選の役割りとは作者の精神を明らかにして、読者の精神と合わせることになり、これは鍾惺の強調するところである。[9] そしてまた鍾惺によればそういう選を精細に行なう選者は作者にとって功臣である。[10] もし選者がなければ、作者の精神は永遠に世の中に現れることができなく、廃棄されるかも知れないから。

ここでもう一つ注目したいのは、鍾惺は常に古人の伝えられている詩が小数であることを強調することである。鍾惺によれば、その理由は主に選の結果である。鍾惺は前掲の「題魯文恪詩選後二則」でもそのことについて言及しているが、「題茂之所書劉脅虚詩冊」[11] の中でもまた「毎に古人の詩に終身するを見る。其の存する所を究むれば一帙に過ぎず、或は数章に至り、則ち心甚だしく之を畏る、裁つことを貴ぶなり。」と同じことを言っている。そして続いてその具体的な例として杜審言と劉脅虚を挙げているが、この二人については『唐詩帰』のそれぞれの評語の中でもその詩の数が少

ないことについて言及している。鍾惺のこういう言説からは彼の古典観が窺えると思われる。竟陵派が「學古」を主張して古典一般を貴んだことは、前掲の拙稿でも論じたことであるが、鍾惺は古人の作品を盲目的に尊重するのではない。古人の作品は、もちろんよくないものもあるけれど、それらは選を経て伝えられたものであるからおおむね古人の精神が現れたよい作品なのである。彼のこのような考え方は、前掲の「題魯文恪詩選後二則」で「詩文多多益々善き者、古今に能く幾人有るか?」と言っているところにもはっきりと現れている。すなわち、よい詩を多く残している天才詩人がいないわけではないが、大部分の詩人の作品にはよいものとそうではないものが混ざっており、そのことは古の詩人も、今の詩人も同じである。

鍾惺のこういう古典観にもやはり、作品にはよいものとよくないものがあり、それを判断するのは選者であり、いったんよいものとして選されたものは時代を問わず通じるという考え方が現れていると言えよう。そしてこういうよい作品は時代を問わず通じる絶対的価値を持っているという考え方は、彼らがよい作品の意味で「可傳者」という表現を使うことからも窺える。前掲の引用文から見ても、鍾惺がよい詩だけを選することを厳しく主張するのは、よくない詩のためによい詩まで廃棄されて後世に伝えることができなくなるのを防ぐためであり、蔡復一も精選した数十篇が後世に伝えられれば満足すると言う。これは、すなわち作者の分身である作品に絶対的価値を託して永久に名を残したいという、一般作者達の当然とも言える欲求を反映していると言えよう。

以上見る限り鍾惺は選の客観性を信じて疑わなかったようだが、ことはそれほど単純ではない。鍾惺は選が客観的でありえることが、難しいのを充分に知っていたのである。前掲の「題魯文恪詩選後二則」の中で鍾惺は、譚元春が選した魯文恪の詩が九十首に及ぶけれども、その仕事ぶりが精密で当を得ていて、その作品を読んで喜び、且つ敬う心が

起ったと言い、もし魯文恪の全集を読んだら必ずしもここまで喜び敬うとは限らないと、選の力を称えた後次のように言う。

然則友夏雖欲不爲文恪功臣、固不可得也。或曰…〝作者如文恪、而後之選者不必如友夏。若之何？〟予嘗與友夏言矣、莫若少作、作其所必可傳者、選而後作、勿作而待選。吁、談何容易哉！

（そうだとすれば、友夏―譚元春の字―がたとえ文恪の功臣になることを願わなくても、それはまことに不可能なことである。ある人が言う…〝作者はいつも同じく文恪であるが、後に文恪の作品を選する人が必ずしも友夏と同じくするとは限らない。こういう場合はどうすればいいか？〟私は嘗て友夏に言ったものだ。少く作るに越したことはない、必ず伝えるべき者だけを作れ、選した後に作れ、作った後選を待つことなかれ、と。ああ、話すだけならばなんと容易なることか！）

すなわち、選の主観性についての質問に対する鍾惺の答えは、作る前に作者が選して必ず伝えるべきよい作品だけを作ることである。ここで鍾惺は選の主観性を認めて、どうせ主観的にならざるを得ないとすれば、作者が選する方が一番当を得ているのではないかと考えたようである。しかし、この考え方は、最初に「簡遠堂近詩序」の中ですでに考察したように鍾惺自ら「（作品を）よく作る人が必ずしもよく裁つのではない」と言ったのとは食い違うことになる。そこで鍾惺は次のようにもうすこし説明を加えている。

夫選而後作者上也、作而自選者次也、作而待人選者又次也。古人所謂數十首、數首之可傳者、其全決不止此。若其善止此、而此外勿作、正予所謂作其必可傳者也。此其識其力、古今又能有幾人乎？

（作者が選した後作るのが一番上であり、作った後作者が自ら選するのがその次であり、作った後人が選してくれるのを待つのがその次である。古人のいわゆる数十首、数首のよい作品も、もともとの全作品はきっとそれより多かっただろう。もしよい作品のこれらの外には作品がなかったとすれば、それは正に私のいわゆる必ず伝えるべき作品だけを作ることである。そのためには「識」、「力」を備わなければならないが、そういう人が古今何人くらいいるだろうか？）『隱秀軒集』・餘集・「題魯文恪詩選後二則」

すなわち、作る前に選してよい作品だけを作るためには、作者が「識」、「力」を持っていなければならない。鍾惺は「蜀中名勝記序」[12]の中で、友人の曹学佺（字は能始）を評して「能始の慧心を取れば作るに難しからず、其の博識はまた述べるに難しからざるなり。」と言っていることからも窺えるように、作品を評すること（「作」に対しての「述」）にはおよそ「識」を備わなければならないと考えたようである。しかし「識」「力」を持っている評者は、外にもたくさんいるはずだから、やはり選評の主観性に対する根本的な解決になるとは言いがたい。しかも、鍾惺自らも言っているように作者でありながら、「識」「力」を持っている人は、古今を通じて極めてまれだからなおさらである。ここで鍾惺は選評の主観性を認識して、問題を創作者の方に帰着させ、その核心から逃げたと言えよう。ただ鍾惺が、作者が作る前に選してよい作品だけを作るのを、作者が作った後自ら選を行うことより上に置いて区別するのは、彼らの言うよい作品の意味がおよそ作者の精神が現れている作品であることを考える時、意味があることだと思われる。すなわち、鍾惺

が「陪郎草序」[13]の中で、「言其心之所不能不有者、性情之言也。（心の中の、どうしても無くすことができなくて言うものが、性情の言である。）」と強調しているように、作者がどうしても発せずにはいられない時だけ作品を作れば、やはり精神が現れているよい作品になる確率は高くなると言えよう。

しかし鍾惺とともに選評活動を行ない、鍾惺とほぼ同じ文学観を持っていると思われる譚元春は、選評の主観性についての疑問をもっと率直に表している。譚元春は自著の題である「題簡遠堂詩」[14]の中で、作品を後世まで伝えるということについていろいろと述べているが、古人を例に挙げてみても、作品が後世にどういう評価を受けるかは作者には分らないことであるという意味のことを言った後、「伝ふることと伝へざることとには、固にまた數あるのみ。吾なんぞ知らんや！吾なんぞ知らんや！」として結んでいる。譚元春のこの発言は、その前の文章の内容からみても自著に対してのただの謙遜だとは思われない。よい詩を目指して選を行なってはいるが、実際に行なわれている外の人の選や、自分の経験からして選は主観的にならざるを得ないものであると実感したに違いない。それは「よい詩」あるいは「精神が現れている詩」、そのものが窮めて抽象的な概念であることを考えれば、当然のことだと言えるかも知れない。

四

以上竟陵派が、当時の人の個人集の場合選についてどういう認識を持っているかを論じたが、次に複数の古の作者の作品から選する場合について考察してみることにする。

鍾惺は「詩歸序」の中で次のように言う。

選古人詩而命曰〝詩歸〟、非謂古人之詩、以吾所選爲歸、庶幾見吾所選者、以古人爲歸也。引古人之精神以接後人之心目、使其心目有所止焉、如是而已矣。昭明選古詩、人遂以其所選者爲古詩。因而名古詩曰〝選體〟、唐人之古詩曰〝唐選〟。嗚呼、非惟古詩亡、幾併古詩之名而亡之矣。何者？人歸之也、選者之權力能使人歸、又能使古詩之名與實俱狗之、吾其敢易言選哉？

（古人の詩を選して〝詩歸〟と命名するのは、古人の詩のすべてが私の選した所に帰結することを言うのではなく、私が選した作品を見た人が、古人に帰着することを言うのである。すなわち古人の精神を引いて後人の心の目と接触させて、後人の心の目が落ち着く所があること、これを言うのである。昭明太子が古詩を選したからこそ、人々は遂にそれが古詩であると思う。だから古詩を〝選体〟と呼び、唐人の古詩を〝唐選〟と呼ぶ。ああ、古詩だけが亡びたのではなく、古詩の名もあわせて亡びたのに近い。なぜか？人を選したものに帰着させるのである。選者の権力は人を帰着させることができて、その上また古詩の名とその実をともに選したものに従わせることができるのである。私がどうして敢えて選を容易に言うだろうか？）『隱秀軒集』・昃集

要するに鍾惺はここで自分が選したものは古人の詩を客観的に代弁できるものではなく、自身の主観が反映されたものに過ぎないことを明らかにしていると言えよう。しかし彼が選した古人の詩には、古人の精神が現れていると同時に彼の精神も現れている。なぜかというと、多くの詩の中で彼の精神と通じあったものを選したからである。従って『詩歸』は、鍾惺によれば「此雖選古人詩、實自著一書。」[15]と説明されている。彼はここに来て選における客観性をあきらめるに止まらず、もう一歩進んで積極的に選に著作並みの自己表現の意味を与えていると言えよう。この点は、彼が当時

の人の個人集を選するとき、その主観性に気付いていながらも、少数の「可傳者」だけ選することを厳しく主張したのとは異なると言わざるを得ない。すなわち、当時の人の個人集の場合は、作品に作者の精神が現れているかどうかを客観的に判断したのである。この違いの理由は、当時の人の作品と一応伝えられた古人の作品とは、自ずとレベルに差がある上に、『詩歸』の場合は作者が複数でそのすべての作者の精神に迫り公正な判断を下すのに限界を感じたことではないだろうか。

このような考えを裏付けるものとして、鍾惺が、『唐詩歸』の中で王昌齢の「出塞」を評する時、次のように言ったのを引用してみる。

詩但求其佳、不必問某首第一也。昔人問三百篇何句最佳及十九首何句最佳、蓋亦興到之言。其稱某句佳者、各就其意之所感、非以盡全詩也。李干麟乃以此首爲唐七言絶壓卷、固矣哉！無論其品第當否何如？茫茫一代、絶句不啻萬首、乃必欲求一首作第一、則其胸亦夢然矣。

（詩はただ佳いものを求めるだけで、必ずしもどの詩が第一であるかを問うものではない。昔の人が、詩經の中でどの詩がもっとも佳いものであるかおよび古詩十九首の中でどれがもっとも佳い詩であるかを問うのは、けだし興が到る詩句のことを問うのである。彼らが某句が佳いと言うのは、おのおの其の心が感ずる所に従うもので、全ての詩を盡すのではない。李攀龍がすなわちこの詩をもって唐の七言絶句の壓巻となしたのは、かたくなである！詩に等級の当否を論じないのはどうしてか？ひろびろとした一代に、絶句はただ万首だけではないのに、必ず一首を求めて第一にしようとするのは、すなわち其の胸の中は夢のようにはかない）『唐詩歸』・巻十一

ここで、詩がよいというのはおのおのその心の感じる所に従うことであり、その全詩をカバーするのではないと、前の「詩歸序」の内容と同じ意のことを言うのは、やはり古人の詩を選の対象にしているからである。そして一代の詩の数が多くて序列をつけないのである。鍾惺はまた次のように言う。

漢魏唐人詩、所以各成一家、至今日新者、以其精神変化分身應取、選之不盡、若佳者一選無餘、則古人亦隘且死矣。

（漢魏唐の人の詩がおのおの一家をなして今日に至っても新しいのは、その精神が変化と分身をもって選に応じ、それを選しても盡きないからである。もしよいものが一度選したら後は残らないとすれば、古人もまたせま苦しくて死ぬだろう。」『鐘伯敬先生遺稿』・巻三・「答袁未央」

すなわち、古人の詩は一度よいものを選したらそれで終るのではなく、また外の選者が何回もよいものを選することができると認めていると言えよう。

鍾惺の詩の選評についてのこのような考え方が極端なかたちとして表現されたのは「詩論」[16]であるが次に引用してみる。

詩、活物也。游夏以後、自漢至宋、無不説詩者、不必皆有當於詩、而皆可以説詩。其皆可以説詩者、既在不必皆有當於詩之中。非説詩者之能是、而詩之爲物不能不如是也。

（詩は生き物である。子游と子夏以来、漢から宋に至るまで『詩經』を論じなかった人はいない。必ずしもみんな詩に当っているとは限らないが、みんな詩を論じることはできたのである。みんなが詩を論じることができた理由は、すなわち詩を論じることはみんなが詩に当るのを必須の条件にはしないという点にある。詩を論じる人がこうするのではなく、詩という物がこうさせるのである。）『隱秀軒集』・列集

すなわち詩は本質的に生き物であるから見る人によってはいくらでも異なる解釈ができるのである。ここまで来れば詩にもし「当を得た解釈」があるとしてもそれはほとんど意味がないものになってしまうわけである。そして鍾惺は同じ「詩論」の中で、鍾惺一人にしても詩を見る心の目が前と今が異なり、従って将来もまた変る可能性があるのに、宋、漢、子游と子夏、作詩者のそれがそれぞれ同じであることを期待するのは、むりなことであると言う。ここで「詩經」を経典として特別扱いしたとは思われないが、やはり孔子の選を経た「最高水準の作品」だからこそ解釈の自由が保証されるわけである。そこにもし作者の精神の現れていない偽物が交ざっているとすれば、説詩者は誰であろうとそれを探さなければならないのである。もちろん説詩者によってどれが偽物になるかが変る危険性は残っているが。

鍾惺のこの論理からみれば、一応よい作品と認められたいわゆる古典は、選をする必要も、評をする必要もないのである。極端に言えば誰でも好きな作品を選して読んだり、評したりすればいいのだから。しかし、実際には鍾惺は『詩歸』を選しているし、「詩論」の内容から見て『詩經』にも評を施していることは間違いないと思われる。それはいくとおりにも説明できると思うが、まず読者の面から言えば、読者の中にはいろいろのレベルの人がいて、鍾惺のような説詩者から一人ではまともに鑑賞ができない人までいるのである。だから説詩者が自分の説の主観性は承知の上で、レベ

ルの低い人を導く必要があるのである。鍾惺は『詩歸』の評語が「和盤托出（さらぐるみ出す、つまり言いたいことを全部言い尽くす）」であると言う、友人の曹学佺の批判について、それは「頑冥不靈（かたくなでにぶい）」な人のための老婆心の発露であると弁解し、[17] また外の所でも『詩歸』の評語は「聾瞽人（つんぼと盲人）」のための老婆心の発露であるだけで、古人の本来の面目には当る所がないと、[18] 一貫したことを言っている。

次に作品の面から言えば、いくら伝えられた古人の作品だと言っても、やはり偽物が混ざっている可能性もあるし、自ずと作品のレベルには差があるのである。それはすでに説明したとおり、伝えるべき作品を選ぶ時の選者の主観に起因するものもあり、また選そのものを経ていない可能性もあるわけである。

最後に、選評者の面から説明すれば、すでに考察した通り鍾惺は（小論で譚元春の言説はそれほど引用されていないが、譚元春の文集を読んでみれば、鍾惺とほぼ同じ意見であることが分る。たとえば「古文瀾編序」[19] 等）古人の作品に選評を施すことを、レベルの低い読者を導くだけではなく、創作並の個性表現の場として看做している。すなわち、当時までの外の選評者達は、たとえ結果的にはその選評者の主観に過ぎないものであるとしても、選評を施すにあたっては、自身の判断が当を得ていると信じるからこそ、選評を施したのではないだろうか。もしそうではなければわざわざ選評を施す必要はないのである。しかし鍾惺は、最初に自分の主観に過ぎないものであることを認めた上で、敢えて選評を行ったのである。ここには強い自我表現の欲求が認められると言わざるを得ない。

しかしここでもう一点指摘しなければならないのは、彼らの古典作品に対する選評活動は根本的に復古思想と結び付くという点である。前掲の「詩歸序」の内容から見れば、鍾惺は古人の精神を得ればそこからまた限りなく変化して行けると思ったようである。（彼らにおいて古人の精神は人間本然の理想的なものである。）古人の詩の中でも、「膚」

「狭」「熟」なるものだけをもって古人と為す後七子らと、古人の外で独創すると言っても結局は古人の一部に過ぎない「険」「僻」なるものしか作れない公安派のため、世の中は真の古人を知らないのである。だから古人の精神が現れている真詩を選して、当時の人を古人に帰らしめんとするのである。鍾惺はたとえそれが古人の全詩を代弁する絶対的なものではないことを認めているとしても、李攀龍の『古今詩刪』なんぞとは比べられないものであると思ったようである。李攀龍ら後七子も、鍾惺からみれば「頑冥不靈」な人、あるいは「聾瞽人」だったかも知れない。というより、大きい古人の詩の前では、自分が選したものが部分化されるのを認めざるを得なくても、実際に選をするにあたっては自分が選したものより勝るものではないと思ったのではないだろうか。前で当時の人の詩を選する時、選が純粋に客観的なもので有り得なかったように、ここでは選は純粋に主観的なもので有り得ないのである。

鍾惺は詩文以外にも、古人の作品の選評に幅広く関心を示している。そしてこういう選評を施すことを総じて「作」に対して「述」と呼ぶ。彼はまた「述」には、古人の精神はもちろん、「述」を施す人の精神も自立して現れているべきことを一貫して主張しているが、「述」を通じて古人と述者の精神が出合うことを、「合述作爲一心、聯古今爲一人（述べることと作ることを合わせて一人の心を為し、古人と今人とを連ねて一人にする）」[20]と表現する。実際鍾惺には彼の著作であることが確実な『史懐』という歴史評論書が伝えられているし、その外にもたとえ真偽が混ざっているといえども、すでに指摘したとおりいろいろな分野の書が選評というかたちをして伝えられているのである。結局、彼は古典一般に対して広く主体性ある解釈を目指したと言えよう。そして詩文の選評は、その中でも彼がもっとも力を入れた部分であると言えよう。

以上鍾惺と譚元春の古典作品（主に詩）に対する選評活動を彼らの理論に即して説明したが、明末は彼ら以外にも選

評活動が盛んであったことを考える時、彼らの選評活動も当然その当時の社会的背景からも説明できる。前野直彬氏の『中国文学史』では、明中期以後の経済発展によって詩文人口が大量増え、創作・享受者の同質的安定性が崩壊され、印刷述の発達によって古典が大衆化されたとする。すなわち、鍾惺が当時の詩人の作品について「可傳者」だけ残すことを厳しく主張したのは、持ち前の批評家的資質の上に、当時の創作者達の質的低下によるものであり、古典の選評に精を出したのは鍾惺の言う「聾瞽人」の享受者達がおおぜい増えたことで説明できると言えよう。そして明代まで蓄積された古典が大量印刷されるようになり、ごく普通の読者がそれに全部目を通すのが難しくなり、選しなければならなかったと言えよう。また竟陵派の選評活動における自我表現の欲求は、思想史的に陽明学左派との関係を類推させられるが、今はそれについて論じる準備ができていない。

五、おわりに

文学作品を評価するにおける主観性の問題は、いつの時代にも最も根本的な問題の一つであると言えよう。しかし、理論的には純粋に客観的な評価、あるいは純粋に主観的な評価なるものが有り得るかも知れないが、実際においてはある所で折衷せざるを得ないもののようである。鍾惺を中心とする竟陵派においても、それは折衷されたものとして表れている。すなわち、当時の人の作品については、作者の精神が現れている客観的に価値のある詩があることを想定して選活動をしながらも、やはり選者によって作品の評価が異なることを認めざるを得なかった。そして自分の主観に過ぎないものであると前置きして、古典の選評を行いながらも、やはりそれによってレベルの低い読者が導かれることを期待したのである。しかしいずれにせよ彼らの選評に対する態度は真剣そのもので、この点は注目に値いすると思われる。

なぜかと言うと、当時までの中国文学批評史はどちらかと言えば創作論中心で、作品と読者との関係を論じる読者論にはあまり注意を払わなかったからである。また彼らが、古典を選評するにおいて選評者の主観を認めながらも敢えて当時までの評語と異なる性格の評語を施して強烈な個性を発揮したのは、当時の読書界に新鮮な刺激を与えたのではないだろうか。小論では、彼らが『詩歸』等に施したその評語の独特な性格については論じていないが、それは次の課題にしたい。

竟陵派に対する今までの評価は、作品はもちろん文学理論の面でもそれほど高くない。清代の正統派文人達の『詩歸』についての非難はいうまでもなく、現代の研究者からも公安派に比べれば体系的な理論の組立てに乏しいと評価されていて、[21] それはある程度事実のように思われる。しかし、彼らが以上のように作品と読者の関係に着目し、実際に詩文の選評にエネルギーを傾けたことは、明末という時代背景があるとしても、評価すべきだと思われる。

注

(1) 『東方学報』第十六号、一九四八年、京都。
(2) 『隱秀軒集』・往集・「與譚友夏」
(3) 『藝文研究』第五十六号、一九八九年。
(4) 「鍾伯敬批評四知館刊本研究序説—水滸傳諸本の研究—」(『東方学』第四十二輯、一九七一年、東方学会)。「鍾伯敬批評四知館刊本の研究—水滸傳諸本の研究—」(『日本中國學會報』第二十三集、一九七一年)。「鍾伯敬批評四知館刊本の研究—李卓吾批評容与堂刊本との関係—」(『広島大学文学部紀要』第三十一巻一号、一九七二年一月)。
(5) 『四庫總目提要』(經部詩類存目)に『毛詩解』『詩經圖史合考』が載せており、内閣文庫には『鍾伯敬評點詩經』『毛詩解』『詩經鍾評』がある。
(6) 東大の東洋文化研究所にも鍾惺と譚元春の書がかなり保存されている。

(7) 『隱秀軒集』・昃集・「種雪園詩選序」
(8) 『隱秀軒集』・昃集
(9) 前掲の「題魯文恪詩選後二則」。『隱秀軒集』・昃集・「詩歸序」
(10) 前掲の「題魯文恪詩選後二則」
(11) 『隱秀軒集』・地集
(12) 『隱秀軒集』・昃集
(13) 『隱秀軒集』・昃集
(14) 『譚友夏合集』・巻八
(15) 『隱秀軒集』・往集・「與蔡敬夫」
(16) 注(5)の『詩經鍾評』の巻首に載せているものだが、『隱秀軒集』(列集)にも載せているので鍾惺の作であることが確かだと思われる。関係論文として、村山吉廣氏の「鍾伯敬『詩經鍾評』の周邊」(『詩經研究』第六号、一九八一年六月、早稲田大学)と加藤實氏の「鍾惺詩論譯解」(『詩經研究』第六号、一九八一年六月、早稲田大学)がある。
(17) 『隱秀軒集』・往集・「與高孩之觀察」
(18) 『隱秀軒集』・往集・「再報蔡敬夫」
(19) 『譚友夏合集』・巻八
(20) 『隱秀軒集』・昃集・「二十一史撮奇序」
(21) 八矢義高氏「鍾惺」(『中華六十名家言行録』一九四八年、弘文堂)